様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：３１３０７
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０５１９

研究課題名（和文）再構築現象に関わる第一言語獲得論：その理論的・実証的研究

研究課題名（英文）A theoretical and exprerimental study on recostruction effects in the first language acquisition

研究代表者
木口　寛久（hirohisa, kiguchi）

宮城学院女子大学・学芸学部・准教授

研究者番号：４０３６７４５４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,300,000円、（間接経費）　990,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究課題では、英語を母国語とする幼児が、発音される位置で句が解釈を受けず、その位置まで移動する以前の位置で解釈を受ける現象、再構築現象（reconstruction）の更なる理論的分析を推し進めると同時に、reconstructionが幼児の文法にも大人と同じように機能しているかを実験によって検証した。最終的には、今回の実験結果に考察を加え、一本にまとめた論文が国際学術雑誌(Studia Linguistica誌)に掲載されることとなり、reconstructionに関わる様々な統語作用、概念の生得性を支持する実証的証拠を国際的に提示することができた。

研究成果の概要（英文）：In this study, a truth value judgment task revealed that 4-5 year-old English-speaking child participants (mean age 4;8) consistently interpreted reconstruction phenomena, where the dislocated elements should be interpreted in the launch positions.
The series of experiments investigated whether children have command of connectivity effects in certain constructions as adults do, while refining the theoretical analysis involved with reconstruction. We found that 4 year-old children alread have had the ablity to interpret the setences which require the reconsruction. The paper that reports these results of our experiments has been accepted for publication by Studia Linguistica.

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語の生得的基盤

キーワード：言語の生得性

１．研究開始当初の背景

再構築現象(reconstruction)は近年、理論言語学においても特に注目を集め、盛んに議論されている研究課題であり、その研究成果が理論言語学に大きな発展をもたらしている。(Lebeaux 2009, Fox 2000, Chomsky 1995 等）それは再構築現象が、移動によって元来の位置に残るものが痕跡ではなく移動された要素のコピーであるという主張の証拠となること、更に見かけ上の構造によって束縛原理が機能するのではないので、移動元に再構築がなされた後に束縛原理が機能するための抽象的なレベル、すなわち意味部門（ＬＦ）の必要性を示す証拠の一つとなるからである。

幼児期の文法における束縛原理と意味部門の相関を調査するため、木口（研究代表者）と Thornton（海外共同研究者）は、英語を母国語とする４歳台から５歳台の子供達の束縛原理 B,C に関わる ACD 構文に対する知識を評価すべく２つの実験を行なった（Kiguchi & Thornton 2002, 2004)。束縛原理Ｂ、Ｃとも代名詞が文中のどの名詞句を先行詞とできるかを規制する文法原理である。束縛原理Ｂは、主に一つの節の中の主語がその節の目的語の代名詞の先行詞になることを禁ずるものである。例えば John washed him.という節において目的語の him は主語 John を先行詞とできない。束縛原理Ｃは一般的な名辞が代名詞表現を先行詞とすることを禁ずるもので、例えば He washed John.という節において目的語の John は主語 he を先行詞にはできない。束縛原理Ｂ，Ｃで排除される名辞と代名詞の関係を含んだ ACD 構文を、英語を母国語とする４－５歳児に判断させる実験を行った結果、子供達は代名詞を含む ACD 構文を大人同様に解釈できることが示された。これは４歳から５歳の子供達の用いている文法でも束縛原理が抽象的なレベルでの適用を受けていることを示唆しており、言語理論すなわち人間言語の生得的知識に関するモデルにＬＦのような抽象的なレベルが必要であることを示す実証的な証拠と言える。その後、両名は科学研究補助金（基盤Ｃ）「削除構文の獲得における日英語比較研究：日英文法の第一言獲得の理論的・実証的研究」での研究プロジェクトにおいても引き続き削除構文の言語獲得実験研究を遂行した。そこで特に、英語における理論的研究では英語の pseudo-clefts で語順倒置が起こっている構文(inverted specificational pseudo-clefts)の構造分析を行ない、Bachrach(2003)の cleft を入力とする仮説をさらに推し進め、英語の inverted specificational pseudo-clefts も、Bachrach(2003)がヘブライ語およびフランス語に対し提案した再構築現象と削除が協働した分析が適用可能であると主張した。よって、この分析が正しいとすると、英語の inverted specificational pseudo-clefts は、元来 cleft から得られたものだという結論となる。

２．研究の目的

上記の研究代表者と海外共同研究者の研究成果を発展させ、本研究では、発音される位置で句が解釈を受けず、その位置まで移動する以前の位置で解釈を受ける現象、再構築現象（reconstruction）の更なる理論的分析を推し進めると同時に、reconstruction が幼児の文法にも大人と同じように機能しているかを実験によって検証する。これによって、reconstruction に関わる様々な統語作用、概念の生得性を支持する実証的証拠を提示するのが本研究の目的である。

３．研究の方法

本研究では、具体的な研究課題である pseudo-clefts とそれに関する現象の理論的分析を初年度に本研究の基礎調査として

行ない、次年度以降の研究の基盤を構築し、その研究の成果を受けて研究課題の再検討を行うとともに、立案した理論言語学的モデルの本格的実証的研究を海外共同研究者の英語を母国語とする幼児を対象にとした実験の形で実施した。そして次年度には、実証実験の結果より、言語獲得理論モデルの検討を行なった。さらに、先に提案した理論的言語学的仮説の修正、及び実験結果の生成文法理論研究における具体的な意義を考察し、最終的に１本の論文にまとめ、国際学術誌 *Studia Linguistica* 誌へ投稿した。そして最終年度は、同雑誌の査読結果をもとに論文を大幅に改定し、再投稿した。なお、論文は最終年度３月に採択が決定した。

４．研究成果

平成23年度は、具体的な研究課題である pseudo-clefts とそれに関する再構築現象の理論的分析を本研究の基礎調査として行い、平成24年度以降の研究の基盤を構築した。本年度度は①具体的な研究課題の一つであるinverted specificational pseudo-cleftsの統語論的分析の精緻化をはかる、②その構文内での否定極性要素の認可と再構築の相関に理論的説明を与える、という二点の基礎調査を行ってきた。そして、そこでの理論から平成24年度以降の研究の基盤を構築する。再構築現象は否定極性要素の認可には適用できないことが知られているが、海外共同研究者Thorntonの観察によると英語のinverted specificational pseudo-cleftsの構文中では、否定の作用域内でしか現れないはずの等位接続のorが否定の作用域外でも存在できる。これは再構築現象が可能な構文ならすべての要素が等しく再構築されるわけではないことを示唆している。平成23年度は、これまでに研究代表者が提案したinverted specificational pseudo-cleftsの構造分析理論を研究分担者とともに更に精緻かつ強固なものに改訂すべく理論的考察を重ねるのと並行して、特に研究分担者の研究成果において前述のパラダイムを説明する統語論・意味論のインターフェイスの構築が進行している。そして、本プロジェクト実証研究の結果を当初の計画通り、ギリシャでの国際学会 Generative Approach to Language Acquisition 2011にて、本年度の成果報告として発表することができた。

平成24年度は、前年度の国際学会（Generative Approach to Language Acquisition 2011）における実証実験報告をもとに、具体的な研究課題である pseudo-clefts とそれに関する再構築現象の理論的分析に本格的に着手した。

主に、①具体的な研究課題の一つであるinverted specificational pseudo-cleftsの統語論的分析の精緻化をはかる、②その構文内での否定極性要素の認可と再構築の相関に理論的説明を与える、という二点に対して理論的考察、検討を行った。

再構築現象は否定極性要素の認可には適用できないことが知られている。前年度の実証実験報告にて、英語のinverted specificational pseudo-cleftsの構文中では、否定の作用域内でしか現れないはずの等位接続のorが否定の作用域外でも存在できることが、英語母国語話者幼児の文法でも成人のそれと同様であることが確認された。これは再構築現象が可能な構文ならすべての要素が等しく再構築されるわけではないことを言語獲得の側面からも示唆していることとなる。本年度は、この現象に対して、Heycock & Kroch (2002) にて提案されている、「表層構造上で、否定極性要素が否定辞をc－統御してはならない」という知見から説明できるとの分析を試みることができた。並びに、前年度の実証実験報告が"Advances in Language Acquisition"に採択された（主な発表論文等参照）。更に、この実験結果及び、その理論的考察を海外共同研究者と共に論文としてまとめ、本年度末

に国際研究雑誌に投稿することができた。

本研究課題の最終年度である平成25年度は、前年度末に本プロジェクトで実験を行ったpseudo-cleftsとそれに関する再構築現象の理論的分析を論文としてまとめ、国際研究雑誌Studia Linguisticaに投稿したのち、掲載決定を目指して、Studia Linguisticaからの査読結果を踏まえ、論文を改訂し、再投稿した。特に、これまでのinverted specificational pseudo-cleftsを用いた２つの実験結果がもたらす言語獲得理論に対する含意について検討を重ねた。これまでの実験結果は、英語を母国語とする3－4歳児に内在する文法にも音韻部門（Phonetic Form）と意味部門（Logical Form）といった抽象的なレベルが存在することを強く示唆するものであり、生成文法的な文法への接近法に支持を与えるものである。その一方で、本プロジェクトにおける実験の結果は、そのような複数のレベルの介在を否定するGoldberg（1985, 2003, 2006)の提案するthe constructive approachの想定とは相反するものである。加えてGoldberg(1985, 2003, 2006)は、言語獲得には一般的な認知メカニズムのみが関与しており、言語機能の生得性は否定する立場を取るが、本プロジェクトで得られた実験結果を、一般的な認知システムのみで説明するのは困難であると思われる。すなわち、本研究の研究結果は、複数の表示レベルが内包されている言語の生得的モジュール性を示唆するのものである。

上記のこれらのポイントを指摘することを念頭に置きながら、本プロジェクトメンバーとともに論文を大幅に改訂し、再投稿した。第二次査読を経て、平成25年度3月にStudia Linguistica 誌より、論文の掲載採用の決定の報告を受けた。（主な発表論文等参照）

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　4　件）

① Bhatt, Rajesh and Shoichi Takahashi、Reduced and Unreduced Phrasal Comparatives、Natural Language & Linguistic Theory、査読有、2011、pp. 581-620、

② Bhatt, Rajesh and Shoichi Takahashi、Book Review: Winfried Lechner, Ellipsis in Comparatives、The Journal of Comparative Germanic Linguistics、査読無、2011、pp. 139-171、

③ Hirohisa Kiguchi and Rosalind Thornton、Connectivity effects in Child Grammar、Advances in Language Acquisition、査読有、2013 pp. 127-137、

④ Hirohisa Kiguchi and Rothalind Thornton、Connectivity effects in pseudoclefts in child language、Studia Linguistica、査読有、印刷中

〔学会発表〕（計　5　件）

① Takahashi Shoichi、Anatomy of Tough Movement、The 29th West Coast Conference on Formal Linguistics、University of Arizona、USA、2011年4月22日、

② Takahashi Shoichi、Traces or Copies, or Both、Kaohsiung Normal University（招待講演）、National Kaohsiung Normal University, 台湾、2011年6月20日、

③ Takahashi Shoichi、Anatomy of Tough Movement、The 3rd Tsing Hua Workshop on Theoretical Linguistics（招待講演）、National Tsing Hua University, 台湾、2011年6月23日、

④ Hirohisa Kiguchi and Rosalind Thornton、Connectivity Effects in Child Grammar、Generative Approaches on Language Acquisition 2011、Thessaloniki, ギリシャ、2011年9月7日、

⑤ Takahashi, Shoichi、The Invisible Side of Clausal Complementation、The Tokyo Conference on Psycholinguistics Seminar（招待講演）、慶應大学、2012年 3月11日

６．研究組織

(1)研究代表者

木口　寛久　（KIGUCHI HIROHISA）
宮城学院女子大学・学芸学部・准教授
研究者番号：40367454

(2)研究分担者

高橋　将一　（TAKAHASHI SHOICHI）
一橋大学・経済学研究科（研究院）・准教授
研究者番号：70547835